寛永諸家譜 清和源氏丁九冊之内 頼光流

31

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (31)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

平器
能勢
清水
福鴻
茲合

寛永諸家系圖傳

清和源氏　丁八

頼光流
平器

そもそめハ瀧抗後より平器よりつゝ

頼光

摂津守　正四位下

母ハ近江守源俊女

淡守府将軍

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

頼國

讃岐守　右馬権頭　從四位下

頼資

左衛門尉　從五位下　下野守

そうじゅう　源抗之号也

資憲

源大史　左衛門尉　生國相模　源抗

資時

源次郎　左衛門尉　生國同前

資家

源三郎　生國同前

資村
孫二郎　生國同前

資盛
源次郎　右馬頭　生國同前

資継
源三郎　生國同前

資貞
次郎左衛門尉　生國同前

資種
三郎左衛門尉　生國同前

資勝
三郎　右兵衛　生國同前

国立公文書館
National Archives of Japan

資政

太郎　左兵衛　生國同前

資元

左兵衛　生國同前

資高

源五郎　對馬守　生國同前

資光

源大夫　生國同前

河内國平野の住人なり初め平野の称号をもちゆ

資房

左兵衛　生國同前

資一

左太郎　生國同前

資好

又太郎　左兵衛　生國同前

資正

左兵衛尉　生國同前

資重

源太郎　左兵衛　對馬守　生國同前

重頼

初八資頼　左兵衛　生國同前

海杭七村と領知

頼俊

對馬守　居住同前

溝杭七村と願じ二十六案して椅列溝

杭乃郷と云ふ諸國より海よりあ

つまりきたる後より筑前中納言秀秋

屬す

頼勝

藤義　石見守

父秀後と同じく諸国より流浪して

生國椅列溝杭

後より秀秋より秀秋恩顧もなく

なりぬ時溝杭とあらためて平器

と称す

東照大権現秀秋いまだ幼少にして

大権現より渇しなくなる

慶長五年石田三成謀反の時大坂より

使を以て勝がりたさうして秋

勝がるを人質として大坂の城へ入り

もとなどのようにとうとき秋勝がむ
ものと大坂にくらる
同年九月関が原合戦の時秀秋三歳と
幼となりて英濃國松尾の城にたて
こもる色よりきき秋勝秀秋より
ていさつのひとを江戸へつかわして
大権現に属しまつべしと秀秋別
れをゆるすゆへ秋勝が臣祢木清
兵衛秋義ら右衛門と江戸にのぼり

て秀秋
大権現にまうづべきれ旨
をつぐ時に
大権現感じたまひ連秋勝が秀秋と
いさむるところなりと祢木秋義江戸
より帰り来りこれを秀秋につぐ
に秋勝に仕ぐ
同年九月
大権現諸軍を率して濃州に出張

向の時は役を頼勝より下されて伯耆
いくさすることや人質といふ弦
ばなんぢがんざしをまもく作じたまふ
なぐ〜と教勝こそ資重と人質らて
こゝまもる
大指現こゝを感じたまひて資重と
関が原より一つきたまふ
大指現八首野が原より出陣とめさし秀秋
八関が原の南の丸山より陣とな
敵兵大若刑戸が浦ハ丸山の麓より陣と
なる時より秀秋が先ぶけ教勝小騎兵
と率して
大指現の御陣よりむらんとすはまを
て大若民が陣よりむりて合戦と
なり敵兵数多をうちとなれり大
若が軍屋ぶて刑戸が浦も少げくづま
く孫より自殺と
大指現勝利若たまひ丸山より おわく

秀秋より御對面の時頼勝とめ
出されての作りし度の合戦勝利と
なりたまふ事秀秋が功小よりてなり
是より京都へ引きたまふなれば
秀秋さきがけしるるべしこれより秀秋と
黒田長政と作和山の城とせむ三成伏
誅の後天下こぞくく
大権現より帰服したまふこと法相
とろくく恵賞をおこなはるゝ時備前
英他国と秀秋より賜たまふ秀秋頼勝
が戦功を感じて備前の小嶋より二万
石の領地をたまふ与力同心共の
是あり之後讃言より流人と成
法華より法華に山家を
同弥
大権現の鈞命とうけ給はり頼勝
もつていとくいとより後世とそ
うるぐ法華と修歴すべしとなり

同十年伏見より
大檀院と称し奉り濃州一万
石の領地と許領
同十二年二月廿四日卒去 四十八歳
心月宗安と号す

資重
お八ノ寺

重勝
牛右衛門 石見守
三歳より父勝重に
大檀院の御命にて家督
家紋 九曜

国立公文書館
National Archives of Japan

平器

良清

周慣寺　生國甲州

武田信虎ニつかへて信虎浪人の时

ものゝこと也りそうゝ

頼成

同記　生國同前

高坂彈正の妹をめとる

信玄勝頼ゝ仕ふ　悦渓常覚と号す

道成

器右衛門　生國同前

めハ勝頼ゝつかふ

良知

東照大権現甲州入國の時おされてつかへ

ゝ仕ふ　法嶽宗壽と号す

第刀　生國同前　勝頼ゝつかふ

大権現甲州入國の時おされ

て仕へ奉る

湯岳玄表と号す

和由

次郎右衛門　生國同前

母ハ小幡惣七郎盛直むすめ

名徳院殿

将軍家へ仕ることまれる

良時

勘三郎　生國同前

将軍家へ仕ることつゝ出書とつとむ

善征

勘兵衛　生國武州

将軍家へつゝくまつり出書とつとむ

千道

忌右衛門　生國同州

名徳院殿の鈞命とつゝ後の大納言

忠長ニ仕ル　鉄岩京心ニ同ト

吉道

器右衛門　生國同所

忠長ニ仕ヘ忠長ニ事あるて後

將軍家ニ仕ヘまつる

道賢

源兵衛　生國同前

母八丹那徳入のむすめ

將軍家ヘ仕へまつる

吉明

四郎兵衛　生國同所

將軍家ヘ仕へまつる

家紋九曲十文字

国立公文書館
National Archives of Japan

能登

頼勝

十郎　生國摂列

多田満仲十世の孫能登太郎判官

源仲の後胤なり累代摂列能登

郡と領ゆこの故に能登と

称号ゆ

頼明

同惜丸　生國同前

八十四歳にて死す

頼幸

左近　生國同前

四十二歳にて死す

頼次

摂津守　従五位下　生國同前

弘長元年　関原合戦のとき、

東照大権現に対し奉り大坂合戦の時御命令

同十九年の冬

天満口に仕寄を構へ

元和元年大坂再乱のとき、名命を

摂州多田庄にゆきて一揆ホ

をたいらく

寛永三年江戸小おめく死ス六十

又案

頼重

次右衛門

大権現小法の御子まつまる

慶長十又年

名徳院殿と申しまつまる

同十九年大坂出陣ニ御供

元和元年大坂再乱の時頼宗と同く

多田庄ニ御ゆき、軍事とはとめ給ち

出仕費少なる

寛永九年より

将軍家ニ御つとめまつる

頼宗

新十郎

寛永十年御書院出番となる
同十一年中奥小入くたくまる
同十三年又御書院出番となる

頼栄

勘十郎
寛永十七年七月廿二日
将軍部屋おくたくまる
同十九年六月廿九日出書院番となる

頼隆

小十郎
寛文九年
大橋現と称したくまる
同十九年元和元年大坂陣父頼次
とおなじく
大橋現の供奉
発御のち江戸

名徳院殿より つゝてゝまつり 頼

将軍家へ めしたのもの

頼春

勝左衛門

寛永九年

将軍家より 法へゝゝ仰

頼之

京右衛門 生國播州 能場

元和二年

名徳院殿と 称しゝゝる

寛永九年

将軍家より ゝゝゝまる

頼永

市十郎

寛永三年

名称院殿と称する

同九年

将軍家より法つゝきを賜る

幕紋柳子牡丹

室町公方家より桐紋をたまはる

ちこの〻衣服の紋ともとゝ

紋ち矢筈とゝて桐紋より

国立公文書館
National Archives of Japan

能勢

某

肥前　生國播磨　法名宗願

頼之

四郎左衛門　生國紀州

國白秀次卒（秀次卒したまひしく）

の浪人となり京都に住居
慶長五年病死　法名日喜

頼安

四郎右衛門　生国同前
伯耆国に属し勅定の役をつとむ
元和九年
台徳院殿へ御目見

久頼

庄三郎　生国武州
寛永六年
将軍家へ御目見
家紋　丸に甲

国立公文書館
National Archives of Japan

清水

某

庄大史　生國但馬

山名右衛門督の家人なり

正親

平右衛門

天正十八年小田原御陣以前より
大権現へ仕へ奉り
元和二年十月六日六十歳にて死す

凞政

平戸藩門　生國摂津國
実ハ山名左衛門尉義政の長男なり後
正親町殿の養子となる
元和三年

名德院殿を称し奉る
同八年より大御番を勤む
同九年より
将軍家へ御仕へ申す

凞豊

正安
家紋九門二引

祐豊

山名右衛門督　但馬守護にして姫路城を

天正八年五月廿一日七十余にして死す法名

宗詮

堯凞

同兵庫又郎　生國但州　姫路の城主

秀吉の代にいたりて但馬へ去て浪人とな

寛永四年七月四日六十九歳にて死去法名
韶仙

堯政

同じく又郎　生國摂津國

大權現へ山名禪高ト上ハ今度大坂ヲ攻
在山名一家堯政ヲ御家へ引取ヲ度ト
言上ス　ヲ付釣命ヲ以テ重テ仰付ラル
ヘキノ旨先ヽ大坂ヲ攻ヘキ上ニテ

ヨリテ大坂ヲ攻ル　但シ
元和元年又月七日大坂の城ヲ落ス年
廿七歳ニテ死ス

家紋桐
流紋七葉根篠

国立公文書館
National Archives of Japan

福嶋

為基

織部　世國參河

今川義元ハ上洛ヘク近江ヒとる義元

死し氏共没落のち

東照大権現為基を沛弱あるに依て濱松

ハ引しりぞくまつ

法室より假として

大檀現より御馬と小條陸奥ふりとめ

ふまの時為基使として申ふくる

玄法院東の頭誘自由なるさる友遠列

懸塚より渡海し御馬をとりとめ

て歓をけとき陸奥守書と為基より

さつく今小こ迄と不相とも

遠州高天神城の時器部左郎右衛門

なりひより弁掃部城中よたてこり

もくに討死せんともく

大檀現大迄ぬきこうめ〻為長命と

もつ事をめて〻曰〻ことめて〻

死をまぬかれ〻む迄為長の一族ふ

ゆへなり家に為長矢文と城中へ射入て

いく蔵堀の時より とよく我小旗寄

とくこれより逃去命とつく

こ迄より器戸兄弟死とまぬれ

後世おさて部川とるこをる

いまゝ紀列大納言頼宣ゟ下ける
天正十二年尾列小牧陣の時為玄蕃門
脇と一旗ゝるゆへの陣小牧むき法華
ゟ合力もなきのむね 泊命とゝふ
すゝゟ投陣よりてもせめゟ内服
そのとき首級をひてこまと献も
大権現為基ゟ軍功と感したまゝ為玄壮
年の時後河江戸ゟ おゝく出番請
きゝ とゝ法ともいゝても元年よりて

為忠

織部　生國後河

大権現ゟ仕ゝまつる

寛永十七年十一月病死　年八十

重次

九郎　生国未詳

大樹院

名徳院殿より法名ありける

享年十二年病ひかりて薨去

為信

九郎義信　生國武蔵

享年十六年

大樹院より法名ありける

翌年本地を相續をそのち

名徳院殿

将軍家へ法名ありける

家紋菊桐遺

国立公文書館
National Archives of Japan

福鴻

某

右清〻 別紙を以て道小路号を生國相列

小條家へ代〻家名

正定

三郎兵衛 生國同前

小條氏世代

幸広

勝重

八左衛門尉　生国河内

名徳院殿

将軍家へ仕つ〳〵

重利

鄙紋花梅遠

落合

正宅

将監　生國尾州

信長へ属ス　病死法名一唐

正安

五右衛門尉　生國同前

大檜隈へ相渡し

寛文十二年 病死 法名清安

安吉

久太郎 生國 堺列伏見

大檜隈

名徳院殿と称する

鄙紋丸内三柏

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan